

## 原富太郎と奨学会顧問直前の存在感と苦悩

——鈴木政次旧蔵書翰をめぐって——

内海 孝

はじめに

娘は父が時々、その「紙」を広げ、じつとみつめて  
いる姿をみた。さりとて、父は娘にその「紙」が何で  
あるか話さない。

父は一九八三年五月二日に亡くなった。一〇年余が  
すぎる。娘は、押入れの天袋に父のあの「紙」をみつ  
けた。父が後生大事にしていた細長い「紙」である。

あの紙が何であったのか。誰彼に聞く。受け継いだ  
娘は二〇一一年八月六日、わたくしにこの遺品をみせ  
つつ語った。

——父は関東大震災のころ、三溪さんの側に仕えて  
いました。十代の小学校高等科しか出ていない元気が  
よかった父でも、三溪さんに接するようになってから、

柔らかくなったようです。いつも「鈴木君」といつて  
かわいがってくれた。あるとき、三溪さんが手紙を書  
いた。父は、この手直しされた「紙」をそのまま手元  
に置く。

このように、娘は周囲のひとに助けられ、父のあの  
長い「紙」が書翰であると見立てることができた。す  
なわち、三溪さんが書き損じ終えるやいなや、側仕え  
の父に捨てるように命じた。だが父は、なぜか捨てな  
かった。捨てるどころか、大切に保存しつづける。

娘さんにお話を聞いた数年後、わたくしは旧知の神  
奈川大学職員から原稿の執筆依頼を受ける——原富太  
郎と「横浜専門学校奨学会」の原稿であった。原富太  
郎の雅号が「三溪」である。だが、前者に知見があっ  
たものの、後者の「奨学会」と原富太郎との接点と関

係はまったく知らなかった。

そこで、締切日に追いつてられつつ、わたくしは二〇一八年三月六日、拙稿「横浜専門学校と横浜の政財界―奨学会の給費生制度をめぐって―」を書きあげた。要点は、なぜ原富太郎が「横浜専門学校奨学会顧問」に就くことを承諾したのか。就任する必要もなかったはずなのに、就任を受けたことの深い意味と広がりをお問いただした。

その意味で、本稿も顧問就任の前段として、その線上にある。しかも本稿では、さらに「奨学会顧問」に就く直前の原富太郎の、今日では忘れられつつある存在感とその苦悩にも想いをほせたい。

それは、当時の原富太郎（三溪）が置かれた立ち位置とその重み、葛藤しつつある内奥を映し出すことになるであろう。

## 一 廃棄書翰とその翻刻

――削除文も生かして――

本稿で検討する細長い「紙」が何であるのか。

タテ一九・二、ヨコが二三・五センチの横長で、右端から書き連ねた「和紙」は、仮に「廃棄書翰」と

指定しても、このままでは欠点をもつ。

つまり差出人（課題1）、受取人（課題2）、年月日（課題3）、いずれも不記載である。これらの課題は、次章以下で検討し明らかにするものの、当面は削除文字をふくめ、全文を翻刻したい。

翻刻にあたって、原文をそのまま生かした。ただ、文面は長い。便宜上、つぎのような作業をほどこした。

（ア）A～Hというふうな段落を設ける。

（イ）行の頭には、数字を置く。

（ウ）削除された文字に「亀甲カッコ」（「」）を付す。

（エ）文字の間隔、旧字、ひらがな、カタカナは原文のままである。

A 1 恭敬存候 陳者過日ハ

2 拝顔之折本日参上

3 仕候様御約束も申上小生も

4 是非参上親敷愚

5 存も申上度存居候處

B 6 此頃中より殊二本日ハ

7 生糸市場の波瀾の為め

- 8 緊急同業者の協議  
9 を要する事差起り候  
10 為め如何とも職責上  
11 欠席仕候事相成不申  
12 不止得御約束を履行  
13 仕兼候様の始末ニ立至り  
14 候間御侘旁書中を以て  
15 申上候宜敷御執成奉存候  
C  
16 伽藍再建ニ付き〔事〕  
17 一皆様御協議の結果  
18 二付きてハ更ニ異存無き  
19 候事  
20 一小生ハ〔目下物質的ニモ〕右  
21 ニ付き物質的の御援助  
22 ハ当分絶對ニ御断り申候事  
23 一小生ハ〔當分之處可成〕  
24 檀家総代として相當の  
25 義務を尽し候事出来  
26 不申候間當分之處可成  
27 檀家総代を辭職仕度  
28 候事
- D  
29 右何卒御許容御願申度  
30 事情ハ兼て朝比奈親  
31 下ニモ申上候通り目下横  
32 濱市内〔の狀態〔モ〕を通りニ一通り〕  
33 〔申上候事の止むを得ざる次第〕  
34 〔ニ御座候御聞取奉存候〕  
35 〔當市内三十有餘の〕大小の神社  
36 〔其他多數の〕佛閣ハ〔三十も〕  
37 一も未だ再建せられたるもの  
38 無之此等ハ皆将来寄付金  
39 ニよるの外〔途〕無之〔たりとて〕  
40 此方多少ハ市の援助も  
41 〔縣廳たりとて費途〕  
42 要望いたし居候得共費用多端の折柄市も  
43 従而太神宮社さへも未だ  
44 またそれらの餘力無し  
45 飯殿〔さへも〕すらも出来不申候  
46 目下寄付金募集中ニ有之候  
47 此等の類ハ數百ニ上る次第  
F  
48 ニ御座候〔従て〕此場合小生としてハ如何  
49 なる事情有るも如何なる

- 50 御言葉を蒙り候とも事の  
51 自然の順序として當分此等  
52 弊市内の神社等の復  
53 與〔興〕を見る迄ハ絶対ニ一歩一〔文〕円  
54 ニテモ〔他〕市外地方へハ援助仕兼候  
G 55 〔事情〕ニ付き何卒檀家  
56 総代としての辞職此際  
57 御聴許被成下度奉願候  
H 58 時機を得次第何時にても  
59 更ニ馳せ参し〔仕申候〕驥尾ニ付し  
60 再建ニ努力可仕候  
61 〔一行空き〕  
62 時機を得次第  
63 時機を得次第  
64 不惡御許容奉願候

以上が、廃棄書翰の全体である。

削除部分を生かすことで、筆を取った当事者がどこに強意を示し、迷いつつ苦悩したのかがわかる。

削除部分はそのまま起こし、あえて順序を変えなかった。そのため文の流れに不自然さが残り、混乱をま

ねく箇所がある。それはD40～E45の間で、40↓42↓44の流れ、43↓45の流れというふうに読んでいただければよい。

## 二 廃棄書翰の構成と概要

——何が課題として浮上したのか——

仮に「廃棄書翰」と名づけた全文の文字起こしは、前章のとおりである。

ここでは、八つの段落（A～H）に分類した構成ごととに、解説し概要を記す。しかも、何が課題として浮上したのかを指摘したい。

A 冒頭は「恭敬存候 陳者」（恭敬存じそうろう 陳ぶれば）である。すなわち、候文（そうろうぶん）の書翰の書出しの常套句ではじまっていることから判断し、本稿の主題である「和紙」が書翰であることはまちがいない。

それは差出人から「差出」＝発信されることなく、側近の元に保存されたことを考え合わせると、これを「廃棄書翰」とするのは妥当であろう。

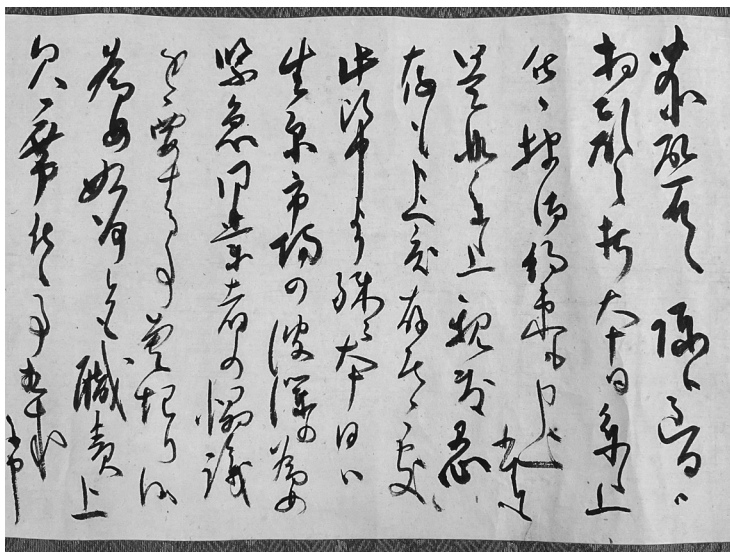


写真1 廃棄書翰の冒頭 (A1~B11)

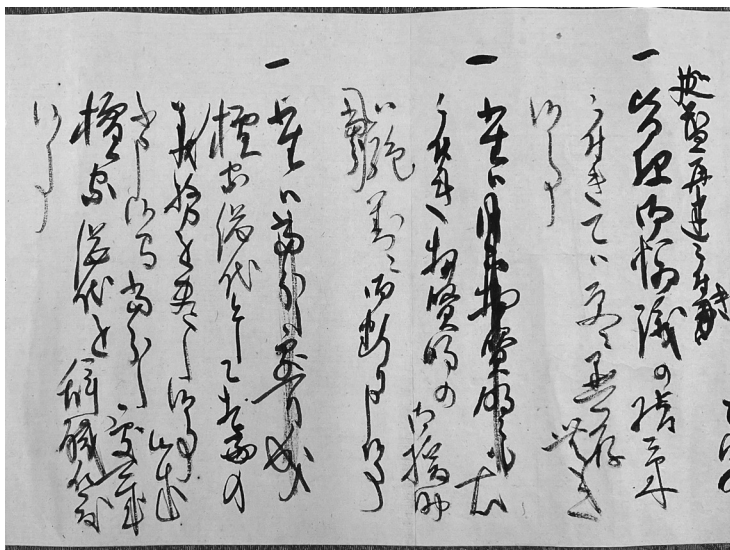


写真2 廃棄書翰の核心部分 (C16~28)

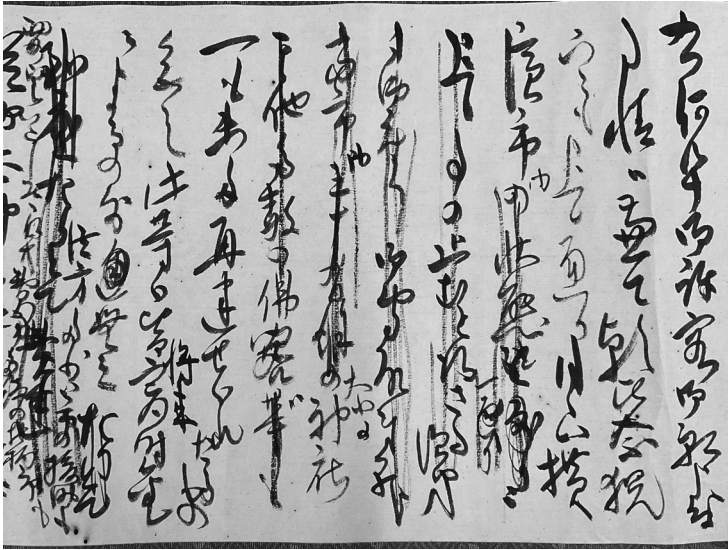


写真3 唯一の人物名「朝比奈祝下」がみえ、訂正いちじるしい文面 (D29~40)

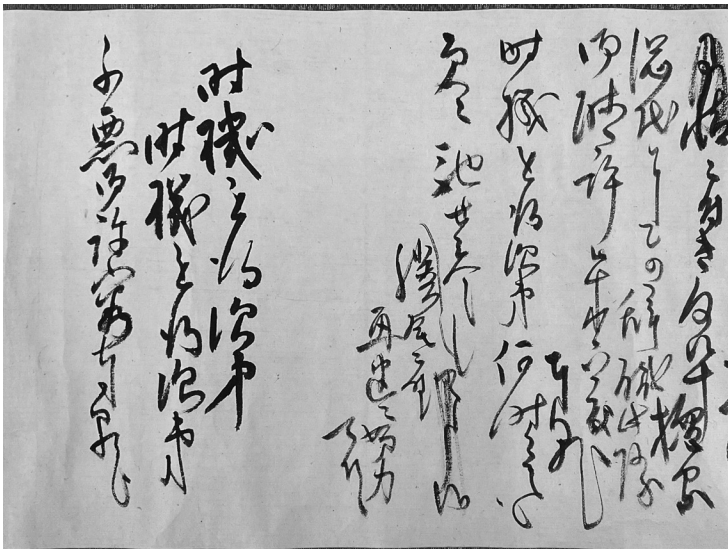


写真4 廃棄書翰の末尾 (G55~H64)



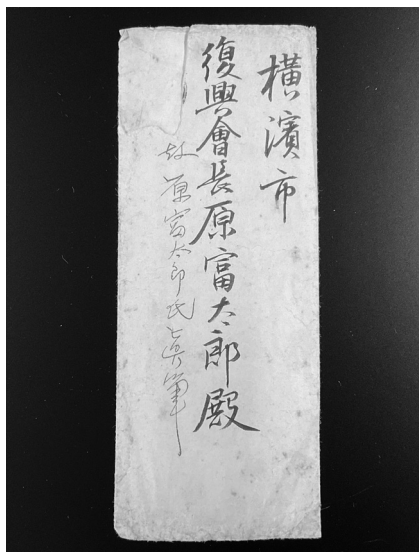


写真 5 廃棄書翰挿入の封筒表書（左端のペン書きが鈴木政次の加筆）

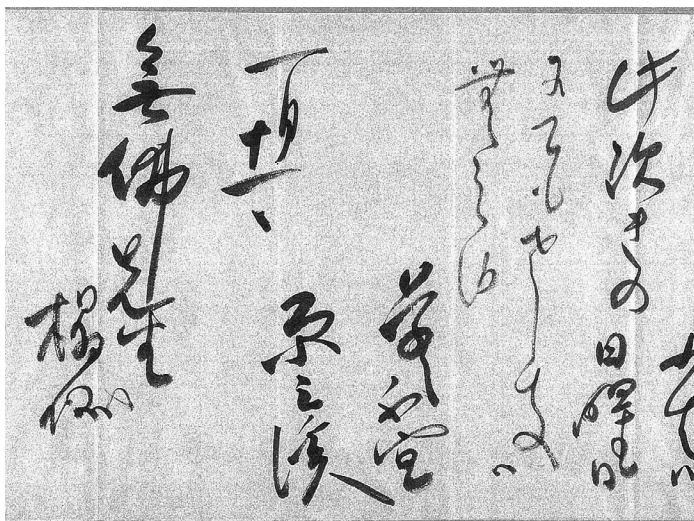


写真 6 原三溪書翰の末尾（国立国会図書館憲政資料室所蔵「阿部充家関係文書」、大正三年一月十一日消印、本稿 18 ページ参照）

書出しの挨拶につづき、差出人が過日、受取人に拝顔した折に「本日」参上する約束をして「愚存」を申しあげる予定であった。書翰の第一段落である。

ところで、課題1の差出人は「はじめに」で関説したように、廃棄書翰の所蔵者と書翰筆跡から判断して原富太郎（三溪）である。

しかも側近の、この書翰をふくむ遺品を整理すると、一通の封筒があった。それは「横浜市復興会長原富太郎殿」宛ての受領済の封筒であった。その宛先を避けるように、側近が左にペンで「故原富太郎氏真筆」と、のちに加筆した<sup>(3)</sup>。側近の強固な保存意志と後世に伝えたい意向が色濃く滲む。

富太郎の書（筆跡）は、親密な取材関係にあった横浜貿易新報社編集局長の山本和久三が「日本人離れのした典麗の筆致を有し」と形容したほどである。<sup>(4)</sup>

山本は「禾口「カコウ」」のペンネームもち、亡き横浜貿易新報社主で、三溪に信頼されていた三宅磐に鍛えられた記者である。三宅磐

は、富太郎とともに「横浜専門学校奨学会顧問」のひとりであった。

では、受取人は誰か（課題2）。しかも、会合日で、書翰に記すべき年月日のその「本日」とは何時か（課題3）。どのような会合であったのか（課題4）。

ところが「本日」の会合には、差出人は生糸市場の波瀾のため緊急に同業者の協議を要することが起こって「職責上」欠席せざるをえない。つまり、参上しての約束が履行できなくなった。お詫びすると。では、どのような「協議」のために、欠席せざるをえなかったのか（課題5）。書翰の第二段落である。

C 書翰のこの第三段落にみると、この「本日」に参上しての会合の用件は「伽藍再建」であったことがわかる。つまり、用件が「伽藍」ということからいえば、寺院関係である。だが、どの寺院であるかは、この時点ではまだ不明である（課題6）。

一 本日の皆様の協議結果については「異存」がない。



D

一 だが、小生は物質的な援助は当分「絶対」にお断りする。

ここに「物質」と記した字は原富太郎の用語として使われる。<sup>(5)</sup>つまり金銭的な援助はできないと、宣言したとみるべきである。一 小生は、檀家総代として当分のところ「相当の義務」を尽すことができない。ついては「当分」檀家総代を辞職したい。

概括していえば、これらの三点はこの書翰の核心部分である。差出人として出席者皆様の協議結果に異存がない。だが、差出人は、ここで「小生」ということばを二度も用いて、みずからの不退転の固い覚悟をしめす——金銭的な援助はできない、ついては当分のところ檀家総代を辞退する。

右のことは何卒、ご許容を願いたい事情については以前、朝比奈〔宗源〕<sup>(6)</sup>殿下にも申しあげた目下、横浜市内の状態を一通り申しあげたい。当市の大小の神社、その他多数の仏閣はひとつも、いまだ再建されていない。これらは皆、将来、寄付金による「再建」のほかない。多少は

E

横浜市の援助もあろう。したがって檀家総代として「当分」は辞職したい。

つまり、差出人は総代辞職の理由はすでに、朝比奈宗源にも伝えているという。朝比奈はこの書翰に登場する人物の、唯一の固有名詞である。その意味で、差出人との親密な距離感を思わせる（課題7）。次章で検討する。

このように、前段のCが差出人にとって最も重要な伝達事項とすると、D以下の段落はCの意向を補強する具体的な事例とみて差支えない。太神宮社（皇大神宮社）<sup>(6)</sup>でさえも、いまだに再建の余力もなく、仮殿すらもできていない。目下、寄付金を募集中である。これらの類は「数百」に上る。

横浜市唯一の県社で「横浜総鎮守」の伊勢山皇大神宮社とも称された太神宮社は、この書翰に表記される事項として、ただひとつの固有名詞である。

原家にとって祖父の善三郎、現当主の富太郎も氏子総代であった。<sup>(7)</sup>善三郎が一八九九年二月六日に死去した翌日、原家はそれを通知し、神

宮社は社司が「早速」に悔やみに赴いたほどである。<sup>(8)</sup>

しかも一九一七年一月一〇日、富太郎長男、善一郎が三溪園で三井合名理事長の團琢磨四女の寿枝と結婚式を挙げた。その直後、園内の善三郎銅像前に報告するために先導したのは太神宮社の宮司である。<sup>(9)</sup>

ところで、太神宮社が震災第一期復興計画を竣功したのは一九二七年（昭和二）一二月、その遷座式が執行されたのは翌年一月九日の夜のことである。<sup>(10)</sup>

F この場合、小生としてはいかなる事情とも、いかなるお言葉をかけられたとしても「自然の順序」として、横浜市内の神社等の「再建」をみるまでは絶対に一銭一文も「市外地方」へは援助しかねる。

G なにとぞ檀家総代としての辞職を、この際お聴許くだされるようお願いする。

H 時機を得しだい、何時にても馳せ参じて、驥尾に付し再建に努力いたしたい。

書翰最後の段階にいたって、一度だけでなく、

三度も「時機を得しだい」と繰り返して記すところこそ、差出人の忸怩たる深い思いと苦悩しつづもどかしい内奥を吐露しているようにもみえる。

いわば、この書翰の主眼点として、差出人＝原富太郎が「本日」の会合に欠席せざるをえなくなったのは、生糸市場の問題が生起し、その会議を「職責上」緊急に出席する必要があることにある（B）。ついては、受取人側の本日の会合に「欠席」し、関係する寺院の「檀家総代」を辞職したい（C）。

その理由は朝比奈宗源にも申しあげている。地元の横浜市内の神社、仏閣がいまだに、ひとつとして「再建」できていないことにある（D）。横浜では、唯一の県社「太神宮社」の仮殿さえできていない（E）。したがって「自然の順序」として地元横浜を優先して、鎌倉のある「市外地方」への援助はできない（F）。

これらが、廃棄書翰の核心と概要である。

横浜市内の社寺被害について具体的概況を示せば、以下のようであった。

表 1 横浜市内の社寺被害概況

		被害／焼失	全潰	半潰	傾斜	大破	計
神社総数	131	15	15	39	—	—	69
寺院総数	195	18	34	26	10	11	99

備考『横浜復興誌』第四編、横浜市役所、一九三二年、五一二、五八六～五八七ページ。皇大神宮の本殿拝殿復旧費は二万八六三〇円三三銭で、県補助金が一万五〇〇〇円、市補助金二万円、氏子寄付金六万三七七六円二二銭である。市補助金の交付が一九二七年一月二日であった(同上、五一五、五一九ページ)。

### 三 朝比奈宗源とその回顧

——書翰唯一の人物名を手がかりとして——

原富太郎は一九三九年(昭和十四)八月一六日早曉、三溪園内の「桃山御殿」の一室にて、七二歳の生涯を閉じた。

当時、稀代の名建築物「桃山御殿」は、豊太閤が聚楽第の別殿として建てたといわれていた。それを三溪が所望して大阪から園内に移築し、一九一七年完成する。これを臨春閣と命名して、徳富猪一郎(蘇峰)に請い玄関にその扁額を掲げた。<sup>(1)</sup>

臨春閣は一九三一年一月二九日、文部省の国宝保存会で、三重塔、聴秋閣、旧東慶寺仏殿をふくむ三溪園の、他の四つの建造物とともに国宝に指定された。<sup>(2)</sup>

三溪の徳川家康、豊太閤好みで、知られていないことがある。地元紙『横浜貿易新報』は三九年四月二〇日紙面で、三溪の容態を察知してか、前日の一九日「社告」を変更した。つまり、現代小説『青春陣容』を掲載予定のところ、翌二二日の紙面からは巨篇講演『太閤記』<sup>(3)</sup>を連載すると。斯界の大家、大島伯鶴の口演であった。

急変更を告げる社告は、太閤記でなく「大閤記」と誤植か誤記するほどの慌てる様子が垣間みえるものの、地元紙の三溪にたいする熱い気配が伝わってくる。

だが、太閤記の連載完結を待たずに三溪が死去するや、五歳年長の徳富蘇峰は「群鶏の一鶴」と形容し、嘆く<sup>(14)</sup>。

富太郎は一八六八年、慶応から明治に改元される直前の八月二日、美濃、のちの岐阜県佐波村に青木家の長男として生を受けた<sup>(15)</sup>。

一八九一年六月二三日二四歳のとき、横浜の豪商、生糸貿易商の原善三郎の孫娘「屋寿」と結婚した。養子入籍は翌年一月一九日である。老松町野毛山の別邸、弁天町三丁目五〇番地とはちがう、本牧の三ノ谷に別邸を建てすみかとする。

その死去直後、業界誌『蚕糸経済』第一一卷第一二〇号は、一九三九年九月一日発行で「巨星・原三溪翁を偲ぶ」として特集記事を組む。

横浜正金銀行頭取の大久保利賢、日本商工会議所副会頭の有吉忠一、増田屋株式会社社長の中村房次郎、前横浜商工〔高工〕校長の鈴木達治、澁澤商店主の洪沢義一、ホテル・ニューグランド社長の野村洋三、院展

同人の前田青邨、美術研究所長の矢代幸雄について、鎌倉五山浄智寺住職の朝比奈宗源が生前を偲び、追悼文を寄せた<sup>(16)</sup>。

とくに青壮年期の三溪と親交を深めたのは、三溪の葬儀委員長を務めた横浜貿易商二代目で同年の中村房次郎、同郷の二歳年少で東京専門学校出身の参謀格であった野村洋三である。

だが本稿では、朝比奈宗源の追悼文に注目したい。当時、朝比奈は一九三四年四月から横浜専門学校で倫理学と国民道德の非常勤講師も務めていた<sup>(17)</sup>。奨学会顧問になった三溪の推薦で就任したと考えてよい。

題名は「蓮華飯と原三溪翁」である。蓮華飯は、三溪が親しいひとに三溪園内で育った蓮の実を使い、青味をそえ汁をかけて供する「飯」のことである。その意味で、朝比奈はのちに検討するが、いつからか、三溪から厚い信望をえたひとであったことがわかる。

さて、この追悼文は以前から何度か読み気になっていた文である。この廃棄書翰の解説をすすめてゆくと、途中「朝比奈猗下」の文字が飛び込む。高僧の尊称、猗下（ゲイカ）を使用する。朝比奈猗下は宗源ではないか。もしやとの思いで、追悼文を改めて読む――

私が原さんを見知つたのは、まだ釋宗演老師が存命中の頃、宗演師の下へよく足を運ばれてゐた頃であつたが、その頃はまだ私が一人前になつてゐない時だったので、原さんのお目にはちつとも入つてゐなかつた。

しかし、その後圓覺寺復興問題を機縁として、原さんに近づきを得るに至つた。それは多分大正十三、四年頃であつたらうか、震災で潰れた圓覺寺の復興のため、圓覺寺復興委員会が組織され、その第一回の委員会が青山會館で開かれた。その席上で、歿くなつた野田卯太郎さんが、自分が委員長になるから、會計に原さんを是非共推薦したいと、原さんの會計就任を非常に懇請せられた。皆も無論原さんの就任を非常に希望した。ところが、原さんはあ、いふ方だから、「私は横濱の復興のために身を賭す決意をしてゐるので横濱の復興以外のことには恐らく十年位ひは手が廻りかねるから折角だがこの際は是非遠慮さして貰ひたい。」と、いつかな引き受けやうとされなかつた〔。〕

それを野田さんが口説かれるので、却々埒があかなかつた。そこで、委員の末席を汚してゐた私は當時若輩だつたが、原さんの決心の動かすべからざるを見て、「原さんの云はれるのも御尤もで、いかに圓覺寺の復興のためだと云つても横濱市の復興を犠牲にしてまでお願いすることは出来ぬから、この際は原さんの仰言るのを通して上げたらどうでせう。」と口を入れたものである。さういふわけで、結局委員長に二條公爵、會計に中島久萬吉男爵が就任せられた。

このことがあつてから、大分経つてからだつたと思ふが、野村洋三さんにお會ひした時、「原君が君のことを非常に面白い坊さんだといつてゐたよ。」といはれた。その後東慶寺を兼務するやうになつて、だんだん親しく御交誼を願つて來たわけである。<sup>(18)</sup>

これが、朝比奈追悼文の前半である。驚くほかないこの追悼文は奇しくも、廃棄書翰の内容ときわめて重なるといわねばならない。書翰の数々の課題への光がみえる。



朝比奈は一八九一年（明治二四）一月九日、静岡県和田島（現在の清水市）の生まれ、父母を幼少期に失った。興津の清見寺で得度し、京都の妙心寺をへて、一九一六年五月、浄智寺の古川暁道に参じつつ円覚寺に通参した。翌年八月、円覚寺に入って暁道の輔佐に当たった<sup>(19)</sup>。

すなわち、釈宗演が一六年五月に円覚寺管長を再任した以降に、朝比奈は三溪を近くで「見知つた」という。暁道の輔佐時代のことである。その一方で、朝比奈の別な親族宛の回想によると、翌一七年ごろ、宗演の「侍者」をしていた時分、三溪に「はじめて」お目にかかったと明記する<sup>(20)</sup>。

その後、朝比奈は東京浅草の海禅寺で修行しつつ日本大学宗教科の夜学に通い卒業するや、浄智寺の住職になった。一九二二年二月である<sup>(21)</sup>。

しかしながら、朝比奈が三溪に「近づきを得るに至つた」のは翌三三年九月一日の大正地震後の「圓覚寺復興問題」が起つた以後である。

この間、管長の宗演は一九一一年一月一日薨化した。その直後、宗演門下の古川暁道が、円覚寺管長を継ぐ。つまり、朝比奈が三溪に「近づき」になったというの

は暁道の円覚寺管長時代である。

追悼文によれば、要点は以下のようである。

- (1) 円覚寺復興問題とくに「圓覚寺復興委員会」が組織され、第一回委員会は開催された。時期は「大正十三、四年頃」である。
- (2) それは、青山会館で開かれた。
- (3) 野田卯太郎は自分が委員長、原さんに「會計就任を非常に懇請」された。他の出席者の皆も、原さんの就任を「非常に希望した」。
- (4) だが、原さんは「横濱の復興のために身を賭す決意をしてゐるので横濱の復興以外のことに恐らく十年位ひは手が廻りかねる」と會計就任を固辞した。
- (5) 議論が滞るなか、若輩の委員であつた朝比奈は「原さんの仰言るのを通して上げたらどうでせう」と発言した。いわば、原さんに助け舟を出す。
- (6) 朝比奈のこの動議が通る。結局、委員長は二條公爵、會計に中嶋久萬吉男爵が就任した。二條公爵は一八五九年生まれの厚基である。

一九一九年父の貴族院議員、基弘から家督を相続して襲爵、母が治子（前田利為の大叔母）である<sup>22</sup>。厚基は一九二二年、牛込の二條公邸にあった桜閣「聴秋閣」を三溪園に移築した。徳川家光、春日局に由来する建物である<sup>23</sup>。

中嶋久萬吉は一八七三年、父の信行が神奈川県令時代に横浜で生まれた。母の初穂は一八七七年に没す。父の坂本龍馬の海援隊同志であった「心腹の友」陸奥宗光の愛妹である。後妻が一八八五年に結婚した女流民権家岸田俊子（湘烟）であった<sup>24</sup>。

桂太郎と西園寺公望首相秘書官をへて、古河鉱業会社時代の久萬吉は今後の経営拡大戦略として横浜電線会社の買収を決心した。その際「横浜財界の重鎮」である原富太郎の「斡旋」で、円満に収容できたという<sup>25</sup>。

しかも、青木家の若き戸主、富太郎と原家の相続人、屋寿とのこじれた結婚話にあたり、跡見女学校長の花蹊とともに母の俊子（湘烟）の骨折りで落着した。当日の媒酌人は久萬吉の両親であった<sup>26</sup>。

この追悼文のなかで第一に注目すべき点は、鎌倉の円覚寺復興委員会の第一回委員会が「大正十三、四年頃」に開催されたというのである。

つまり、課題2の書翰受取人が誰であったのか。それを特定できる。円覚寺管長の古川氏、曉道慧訓である。朝比奈が鎌倉を最初に訪問した際、眼をかけられた老師であった。その手足となつて、円覚寺の復興再建に尽力する朝比奈の姿が次章で検討する野田卯太郎日記に頻繫に登場する。

その延長線上からいえば、課題4の会合名も判明する——「圓覚寺復興委員会」第一回委員会である。

第二の重要な情報として、会合が開催されたのは「青山會館」である。それは、課題3Ⅱ会合日の特定化につながる可能性がある。次章に委ねたい。

第三に、第一回委員会の、仮の委員長格は野田卯太郎である。当時、野田は福岡県選出の立憲政友会重鎮の衆議院議員であった。野田の推輓で、原富太郎は「会計担当」に充てられる。だが、原は「横濱の復興のために身を賭す決意」を述べて固辞した。その原に助け舟を出したのは「若輩」の朝比奈であったこと

が明らかになる。

じつに、この議論の箇所こそ、本稿のこの書翰が不要で「廃棄」されるにいたった事由として浮上する。

つまり原はこの書翰を書きつつ、自身の職域の生糸関係会合出席を優先して、円覚寺復興委員会に欠席する心積りであった。

だが、朝比奈によると、原は使者を使つての書翰の方法でなく、会合にみずから出席したことがわかる。つまり、この手直しを重ねた書翰に差出人名、受取人名、日付がないのは使者に持参させる心積りの書翰であったことを表す。

それが、そのままの形で保存されたのはこの書翰が「使用」されなかったからである。その意味では、この書翰は図らずも、原富太郎が出席した会合で述べた内容の核心と苦悩を顕在化させつつ、逡巡する内奥を反映しているといえよう。

原富太郎が封書で書翰を差し出した例がある。それは、国民新聞社の阿部充家宛て書翰の封筒裏が「横浜本牧町／原富太郎／一月十一日」である。消印が「3.11／横浜」で、頭の3は大正三年と判断できる。

この書翰は正月であるので「恭賀新年」で書き出す。

恵賜された大智禪師偈集のお礼状で、末尾は「原三溪／一月十一日／無佛先生／拜復カ」で終わる。<sup>27)</sup> 無佛は阿部充家の号である。封書で差し出せば、書翰の末尾は、この形式＝署名（差出人名）／「年」月日／宛名（受取人）を踏む。

このように、この追悼文は書翰の課題を解く糸口を与えてくれた。しかし、このなかで朝比奈は書かなかったことがある——三溪死去直前の八月十三日、最愛の娘、西郷春子は父の容態が「憂うべきこと」を三溪園の紅白の蓮華を持参し朝比奈の元に伝えにきた。

それに応え朝比奈は、一詩を賦して三溪に郵送した。その漢詩は死去前日の一五日前、三溪のもとに届く。三溪はその詩の意味を娘に説明した。その午後、三溪は雪舟の絵巻を鑑賞する。<sup>28)</sup>

三溪と朝比奈との関係は、このように円覚寺復興委員会を機縁としてしだいに「心友」の間柄に深まったといえよう。

#### 四 青山会館の開館と円覚寺震災復興委員会

——第一回委員会の成立と期日をめぐって——

野田卯太郎は一八五三年（嘉永六）十一月二日、

南筑後、のちの福岡県三池郡岩津村で生まれた。安政二年（一八五五）乙卯の一月八日生まれともいう。<sup>(29)</sup>

本稿の主人公のひとりである野田の詳細は別稿に委ねる。<sup>(30)</sup> 必要な範囲で浮上した「円覚寺」との関連で述べたい。野田は一九二七年（昭和二）二月一日、数えの七五歳で生涯を閉じた。

その葬儀の際、円覚寺は弔詞を読む——無門院釋大塊自適居士、深く瑞鹿山頭の風月を愛し、密に佛祖不伝の妙道に参ず。（中略）無礙の禪機と円融の世機とを恣（ホシイママ）にしたる七十五年の遊戲三昧は、恰も巨鯨海水を吞尽して、塩気を吐くが如くに似たり。

居士夙に愛山護法の信念に住し、三寶会員として、外護（ゲゴ）の任に当ること多年。偶（タマタマ）大震災に遭うて、鹿山の殿堂潰滅に帰するや、居士老軀を提げて、当山復興の顧問となり、有志の間を奔走し、同化（ドウケ）の縑素（シソ）を奨励して終始渝（カハ）らず、諸縁漸く熟して、起工将に旬日に迫るに至り、居士溘焉（コウエン）として逝（ユ）いて帰らず、豈痛惜せざるべけんや。

世上齊しく居士が妥協の純心を謳歌す（中略）居士の笑声、猶ほ耳にあり。松風に和して鎮（シヅカ）に

聴かん哉（カナ）<sup>(31)</sup>。

三節にわたる第一節冒頭は戒名である。四字目の「釋」は、野田が心酔した円覚寺管長であった亡き釈宗演に因る。宗演は一九一九年（大正八）十一月一日に示寂、数えて六一歳であった。つぎが野田の号「大塊」が入る。その容姿をたとえたのが、つづく「巨鯨」である。最大が三三貫（一二三キロ余）の体重で、見事というほかない形容といえよう。

瑞鹿山は円覚寺の山号である。元寇時の一二八二年（弘安五）二月八日に創立された際に、群鹿が来集した。開山の無学祖元はそれを瑞祥とした。

二節は、円覚寺の護持会である「鹿山三寶（宝）会員」として尽くす。とくに一九一七年二月四日午前一時、野田は三井の早川千吉郎邸で開催された三寶会拡張の相談会に、中嶋久萬吉、浜口坦、町田徳之助とともに出席し、宗演からは頼りにされる。<sup>(32)</sup>

鹿山三寶会は一九〇一年（明治三四）一〇月成立する。布教伝道、教線の拡張、円覚寺の布教の諸事業、堂宇境内の整備など護法護持の会であった。主唱者は原富太郎、早川千吉郎、鳥尾小弥太ら八名、のちに浜口坦、中嶋久萬吉が加わる。<sup>(33)</sup>

一九二四年九月一日、関東大震災が起きた。鹿山の殿堂が「潰滅に帰する」や「復興の顧問」となった。さきに朝比奈宗源が回想した内容に重なる。野田は「有志の間を奔走」して、復興資金の浄財を呼びかけたと、回想する。

三節目の「世上斉しく居士が妥協の純心を謳歌」する箇条は、野田の政治的な立ち位置をあざやかに示す。いわば「妥協」の政治家といわれた野田を評する。円覚寺と野田との距離がいかに近かったかを表裏なく捉え回向したことがわかる。宗演の後任管長、古川堯道の弔詞であったといえよう。

だが、この「弔詞」で明確でなかったことがある。それは、野田と円覚寺、ひいては釈宗演とがいつ、出会ったかである。

野田は一八八〇年代以降、出身地の福岡県大牟田地域、とくに三池炭鉱を含む地域産業とともに歩みつけてきた。三井物産との関係を密にして経済、政治活動を積み重ねる。野田は一八九八年（明治三二）三月に初当選して二期目の衆議院議員で、実業での失敗を契機として禅宗に近寄る。

一九〇〇年（明治三三）四月、野田が会長を務める

九州紡績会社の大阪出張所長が社金を流用して投機に失敗した。損害は四〇万余円、議員年俸が二〇〇〇円の時である。その後始末に忙殺されるなか、三井との折衝で上京する。出張所長は、国民新聞社を創設した徳富猪一郎の紹介で入社した。上京中、野田を訪ねた国民新聞社の阿部充家に会って問う——精神も疲労したタイ。何かい、精神の転換法はあるまいかのう。

阿部の紹介で、野田は五月一二日京都嵯峨野の天龍寺峨山和尚に会う。天龍寺は臨済宗天龍寺派の大本山で、一三四五年足利尊氏が後醍醐天皇の冥福を祈るために建立された。夢窓疎石が開山である。では、野田はいつ、鎌倉禅の円覚寺との接点をもちはじめたのであろうか。

それは野田日記によれば、日露戦争直後の一九〇六年（明治三九）四月四日（水）午前一〇時、円覚寺の「故執権時宗公の祭典」に訪れた。これが最初である。友人の阿部充家が開基の北条時宗の「贈位祝」について寄付を求めにきたのがきっかけであった。

ついで八月二一日午前九時、建長寺、円覚寺を「参詣」する。円覚寺で執事の佐藤虎丘翁に茶の接待を受けた。野田は金五円の香典を差し出す。緑深い境内、



梵鐘の音が印象深かったとみえ「梵鐘の雨」と表現し、詩を読む——円覚寺の緑 時宗や仏光を知らぬ 円覚寺。実直な発露である。

香典の五円は、鎌倉の小学校教員俸給平均月給一七円三五銭をみても弾んだ金額である。釈宗演の月給に相当する<sup>(35)</sup>。だが、村人からは「管長さん」と慕われていた。

鎌倉幕府執権の北条時宗は元寇時の一二八二年（弘安五）、彼我將兵や遭難横死したひとたちの菩提を弔って創建したのが円覚寺である。しかも、開山として恩師の仏光（国師）＝無学祖元の報恩に酬いようとした由来の臨済宗円覚寺派の大本山であった。いわば鎌倉禅の源である。野田にとっては、元寇は地元福岡に繋がる。香典を差し出したのは、この縁を感じ入ったの意味も含んでいたともいえる。

だが、いずれの日も、釈宗演は不在であった。前年の六月一日から米欧に布教の旅に出て、横浜に帰港するのはこの年九月六日である。宗演のこの帰国は、何かと新聞報道で評判となる。それを知った野田は、座禅は「山門結界」では面白くなかうと考え「街頭俗塵」のうちに「端座工夫」が肝要であると思案する<sup>(36)</sup>。

そこで誕生したのが東京都心部、日比谷の三井集会所を会場として、座禅会をおこなうことであった。發起人は政治家の大石正巳（憲政本党）、大岡育造（立憲政友会）、三井の朝吹英二と早川千吉郎、野田、徳富猪一郎である<sup>(37)</sup>。新聞報道が徳富の名前を最後に記名したことを考えると、事務に当たったのは国民新聞社の阿部充家であったであろう。名づけて「碧巖会」という。

碧巖（ヘキガン）は『碧巖録』に由来する。臨済宗「宗門第一の書」といわれている本で、標題に「佛果圓悟禪師碧巖録」とある。佛果、圓悟（エンゴ）ともに、諡号である。佛果は中国の宗時代、徽宗（キノウ）<sup>(38)</sup>皇帝から贈られた号、圓悟は高宗皇帝の諡であった。重要な公案（課題）の百則について、評や指針を示す。漢文の原文に和訓と提唱を対にして講義した。難解である。

野田は一月一七日土曜日の午後二時、第一回碧巖会に出席する。すると、数日後の一月二二日、釈宗演師からは「揮毫」が来る。ということは、野田が宗演に出会ったのは第一回碧巖会例会の、三井集会所大書院の会場であったと考えてよい。その半年後の一九

○七年七月二三日（火）、午前九時半、野田は東慶寺の宗演老師を訪ねる。そこで、禪家のアメリカ婦人と老師とともに、写真を撮る。三日前の二〇日土曜日、碧巖会例会で、老師からは禪家のアメリカ婦人が帰国する旨を聞き、興味を覚えて来たのであろうか。

この東京都心部の碧巖会は、一九一六年（大正五）一〇月二一日をもって「明治三十九年以来十一年、帝都禪会中最大のものたり」と、宗演は総括する<sup>(39)</sup>。その意味で、野田の都心部座禅会発案は奇しくも、鎌倉禅の都市化を呼び起こしたといえる。

この後の野田は、宗演との交流がますます深まり、布教活動への支援を惜しまなかった。とくに一九一七年（大正六）一月一日、時の首相寺内正毅を紹介したことである。それは、半年後の九月八日の「訪支」巡錫に結びつく。八月七日、老師は野田からの電報に接するや上京した。首相官邸で寺内首相と会い、午餐は野田宅である<sup>(40)</sup>。

老師は八月二五日、野田の手をへて寺内首相から「支那行の旅費」と「三宝会への寄付」を受ける。このように、老師は二条厚基、大野宗達を随伴して「訪支」巡錫に向かう。帰山は一月二五日である。日露

戦争従軍布教につづく、鎌倉禅の大陸布教である。野田に代わって、円覚寺震災復興委員会の委員長に就いたのは随伴した公爵二条厚基である。

それに対して、釈宗演の欧米布教Ⅱ欧米巡錫を経済的に支えたのは、原富太郎である。生糸貿易の対欧米経営戦略を重ねる。原家は先代の原善三郎時代から鎌倉円覚寺との関係が密接である。一八八五年（明治一八）七月、鎌倉保勝会が組織された——数百年来の勝概は愈々荒廃して終に湮没し、希世の珍宝空しく蠹蝕（「トツシヨク」）腐朽して復た收拾すべからざるに至らんとす<sup>(41)</sup>。

発起人は神奈川県令の沖守固、原善三郎、茂木惣兵衛、平沼専蔵、渡辺福三郎、木村利右衛門、箕田長二郎、朝田又七、若尾幾造、田中平八、高島嘉右衛門、樋口登久次郎、原六郎、西村喜三郎、小野光景、大谷嘉兵衛で、貿易商を主とする横浜商人である。地元の発起人が建長寺、円覚寺、清浄光寺（遊行寺）、光明寺で、主意書は円覚寺が主導した。

県令の沖が四〇〇円、その倍の最高額八〇〇円が原、茂木、平沼、正金銀行の原六郎である。外国人は横浜居留地の商人ジェームス（E. S. James）、お雇い外国

人技師のパルマル (H. S. Palmer) が一〇円、三井の一家が総額で二五〇円である。三井家は、幕府の命令で横浜開港に合わせ「国のかざり」として出店した。その意味で、開港以後の鎌倉寺院は横浜商人の庇護のもとにあったといえる。

その動向にあわせるかのように、横浜商人は一八九二年 (明治二五) 九月、郊外の戸太村太田に、円覚寺直属の久保山別院を設けた。円覚寺附庸の浄智寺客殿を移建して、布教道場と葬祭回向を主とする特別の別院である。檀家総代は原善三郎、海老塚四郎兵衛、新堀丑太郎、住職が釈宗演、住職代理が鈴木天敬であった。<sup>(43)</sup> この別院は八四年一〇月天敬ら有志が建議したものである。

原家は九五年一〇月一〇日、善三郎夫人の孝子、同二三日善三郎子女の八重子、九九年二月一六日善三郎の「下火」を別院でおこなった。善三郎の別院檀家総代を引き継いだのは釈宗演の円覚寺管長時代、一八九一年 (明治二四) 六月二三日八重子の娘「安」と結婚した「青木」富太郎である。

宗演は一九〇五年 (明治三八) 一月、建長・円覚両派の管長職辞任を発表し、四月下旬に円覚方丈を出て、

円覚寺附庸の東慶寺に遷る。アメリカ布教への準備である。この米欧巡錫に賛意を示し経済的に援助したのは宗演によれば、原富太郎、野村洋三、海老塚四郎兵衛の三人である。<sup>(43)</sup> とくに富太郎の知見と経済力をもつてすれば、最大限の援助を申し出たことは疑いない。

宗演は一九〇五年六月一日、ラッセル夫妻 (Alexander Russell) の待つサンフランシスコに向かい、翌年九月六日、横浜港に帰着した。帰国後の一九〇七年 (明治四〇) 十一月二六日、東慶寺仏殿を富太郎の三溪園に移建したのは米欧巡錫のお礼の意味合いをもっていたかもしれない。その代わりといってよいかどうか迷うが、富太郎は原家先祖霊と自書の位牌を東慶寺に安置する。<sup>(45)</sup>

その意味で、野田が当初、円覚寺震災復興委員会の「会計」担当に原富太郎を指名したのは故なしとしなければならぬ。だが、この時期と事情が富太郎をして、苦慮して懊悩する様相は一見、意固地にみえる立場を取らせた。

その点にこそ、富太郎の同委員会での発言——「横浜の復興のために身を賭す決意」がある。横浜の地は富太郎にとって、近代日本貿易の「大宗」である生

糸賀易の主戦場であった。関東大震災は、それほどに甚大な被害を港湾もふくむ横浜に与えたのである。

では、円覚寺震災復興委員会第一回合会はいつ開催されたのか。それも、朝比奈宗源によると、青山会館で開催された。課題3と4である。検討するために、表2を作成した。関東大震災は一九二三年（大正一二）九月一日、正午直前に発生した。野田はその日も日記を記す——大震災、と大文字で書く。以後にいたっても行動しつつ書く。

野田は一八九八年（明治三二）三月、第五回総選挙で福岡県から出馬して初当選した。伊藤博文総理と地元隣接地の推挽である。一九一五年三月大隈重信内閣の第一二回総選挙にあえて不出馬したことを除き、当選を重ねた立憲政友会議員である。

一九一八年九月、原敬が内閣を組織するや、野田は通信大臣に任じられた。原首相暗殺後も継続し、二二年六月免ぜられる。原敬とは一九〇〇年（明治三三）八月一二日、東京の伊藤博文宅ではじめて会う。直後の一〇月二五日、伊藤から頼まれ、大阪毎日新聞社長の原敬に立憲政友会に入党するように大阪で催促した経緯があった。

大震災翌年の一九二四年五月、第一五回総選挙では福岡県大牟田市から出馬した。野田は選挙戦に来牟できないなか、一〇名の弁士、三男の秀助が来牟する。

郷里の三池郡岩田と二川村民代表も、脚絆草鞋に握り飯を腰にぶら下げて、市内各区に個別訪問して応援に<sup>(46)</sup>来た。当選一〇回の圧勝で、応援の要諦は野田の信条「護憲のため」である。

野田は、徳富猪一郎が一八八七年（明治二〇）二月一日刊行した雑誌『国民之友』に触発される。自由民権運動を担った平民主義者である。しかも「家庭本位」をかぶせる。つまり、民権論者が家庭の平和を破り、財産を失くしてまでも「国事」に奔走するのは、目的は「立派ぢやけん<sup>(47)</sup>ど、手段方法が間違ふ<sup>(48)</sup>と思ふ」との信念を抱く。

徳富は一八六三年生まれ、隣県の熊本出身である。

野田は『国民之友』の章句に共鳴すると、経営する三池銀行用紙裏に書つけ信条とした。それ以来の密接な関係にある。

徳富は一九二一年一二月、二三年に還暦を迎えるにあたり何か「社会奉仕」をなすべきと考えて公表した<sup>(49)</sup>。東京青山南町六丁目の、明治神宮表参道前の自宅五一

表 2 野田卯太郎と円覚寺（1923～26 年）

年 月 日		事 項
1923	9. 1	正午大地震〔大きく書く〕
	9. 25	四郎太〔次男〕の訃音
	10. 25	円覚寺、東慶寺〔自動車ニ而〕
1924	5. 15	古川管師〔長〕
	6. 24	看護婦ヲ返ス、副総裁ニ就任ス
	10. 2	朝比奈宗源
1925	10. 3	朝比奈宗源
	1. 4	東慶寺〔宗演墓参〕、小町園〔禅忠来訪〕
	1. 30	青山館〔ママ〕
	2. 2	零時半青山会館〔連談会〕
	2. 25	一時青山館〔ママ、新聞記者招待〕
	4. 3	青山会館開館式
	4. 10	高橋〔是清〕邸幹部会〔田中義一新総裁引合〕
	4. 17	商工大臣任命〔加藤高明内閣〕
	4. 18	商工省出勤
	4. 20	一時半青山会館
	4. 26	青山会館〔大谷光瑞講演〕
	5. 25	大病ヲ発ス〔以後空白〕
	8. 2	商工大臣・立憲政友会副総裁ヲ辞任
	8. 21	朝比奈他一人〔＊注〕
	10. 2	二條公爵母堂葬式〔俊作ヲ遣ス〕
	10. 27	小町園へ転養〔医師看護婦同行〕
	11. 1	宗演師七回忌（東慶寺）
	11. 18	原富太郎 朝比奈他二人
1926	1. 7	円覚寺、宗演墓参
	3. 21	原富太郎ノ来翰 朝比奈
	12. 27	青山会館

備考「野田卯太郎日記」（国立国会図書館憲政資料室所蔵）による。動  
静欄は本稿の展開に必要最小限の事項に制限した。〔＊注〕の朝比  
奈宗源の記載は以後、二五年が全部で 11 回、古川曉道が 2 回を数  
え、すべてを表出しなかった。



七坪を売却し、それを基金に社会教育の会館を提供したかった。それが「青山会館」である。

表2から、青山会館の推移をみてみたい。徳富はまず、親友の野田にその構想段階から相談を持ちかける。野田はすぐに応じて、二万人から六〇余万円の募金を集めた<sup>(49)</sup>。三階建ての会館は一九二三年三月着工、大震災で中断し翌年一二月末に竣工する。表2に青山会館が登場するのは、一九二五年段階である。野田が館長を務めたからであった。

だが日記(表2)によれば、野田は大震災後の一〇月二五日、円覚寺、東慶寺を自動車で訪れた。震災当時、朝比奈宗源は来る九月三日の開山仏光国師の「毎歳忌」にあたり、早朝から一山総出で準備に忙殺された。だが伽藍は、仏殿、大方丈、庫裡、書院、僧堂は禅堂、舍利殿、隠寮、塔頭諸寺の建物もほとんど全壊する<sup>(50)</sup>。

野田は、香川県仲多度郡の郡長を務めていた二男の四郎太が神経衰弱で不慮死した心痛と自身の持病を押しての鎌倉参りであったと思われる。

大震災の翌二四年、野田の動きをみると、円覚寺との接触は三回である。五月一五日、釈宗演後任の古川

慧訓(堯道)管長、一〇月二、三日と二日連続で、朝比奈宗源に会う。野田は何を話題にしたかは書かない。

だが、寺寄弘康論考によると、円覚寺は一九二四年臨時議会の協賛をえて、古社寺臨時保存金中より金一万七三〇〇余円の舍利殿復興費を与えられる。さらに、二五年六月二三日付で、所管の文部省宛てに「御下賜金請願」を申請した。それが認められ、円覚寺は二五年一二月、皇室から一〇〇〇円を下賜するという伝達内容があった。

しかも、この「御下賜金請願」は円覚寺仏殿、その他の伽藍の再建にあたつて、復興事業を四期に分け施行する計画を立て、工事費の金五〇万円を一〇箇年間にわたつて、全国から寄付募集するという案件を文部省に出願し許可されたことがわかる。

円覚寺復興委員会の母体となるような計画案であった。それは、野田のつぎの談話に重なる——十五万円の基金を募るのに、坊主どもが托鉢をするちうから、馬鹿なことを言つちやいかん。世間で円覚寺ばかりが寺ぢやなかちうて、俺が原(著者曰、原富太郎)に手紙を書いてやつたりしたい<sup>(51)</sup>。

すなわち、野田は徳富の青山会館計画を実現したよ

うに、円覚寺の復興計画資金も全国からの募金に頼る同じ方式を円覚寺側に提案して、採択された可能性が高い。そのための会計担当が原富太郎であった。

表2の一九二五年欄は、青山会館の事項が数回登場する。それは、野田が館長を務め、開館した年であった。すると、朝比奈宗源が回顧したように円覚寺震災復興委員会第一回会合は「大正十三、十四年頃」としたのは大正十四年で、一九二五年が正しい。使い慣れない年初や記者発表時の日記では青山館、四月三日の開館式以後になると正確になる。

では、円覚寺震災復興委員会第一回会合はいつ開かれたのであろうか。開館以後、青山会館が日記に記載されるのは二回、四月二〇日と二六日である。この前後の野田は前年の総選挙の結果、護憲三派の加藤高明内閣が成立し、第二党の立憲政友会副総裁として転変する政局の渦中にあった。

治安維持法、とくに選挙改正案＝普選選挙案で政府と衝突するも、三月一日加藤首相は突然に妥協した。二九日同案の貴衆両院妥協案を議し通過した。三一日は閉院式に臨む。しかし四月四日、農林大臣を務めていた政友会総裁の高橋是清が辞任を表明するや、その

調整で忙殺される。後任総裁として田中義一と交渉し成功させたのは四月一〇日である。

一週間後の四月一七日（金）、野田は四月一日に新設された商工省の大臣に任命される。翌一八日（土）、商工省に出勤する。二〇日（月）午前一〇時政友会本部をへて、商工省に行く。午後一時半、青山会館へ。それ以上の記載はない。

四月二六日（日）は、青山会館に向く。西本願寺派の大谷光瑞が講演し、それに出席して「聴く」。四月中の青山会館で、円覚寺の会合がおこなれたのは二〇日であろうか。

一方、原富太郎の書翰「本日ハ生糸市場の波瀾の爲め緊急同業者の協議」があったのはいつのことであつたのであろうか。

横浜では一九二五年三月二八日、横浜港の震災復旧工事が竣工し竣工式が挙行された。首相、内相、蔵相は代理をたて、県知事、市長、市会議長〔平沼亮三〕、港湾協会長、商業会議所会頭〔井坂孝〕、横浜復興会頭〔原富太郎〕の順序で祝辞を朗読した。かつこ内の人物は横浜専門学校奨学会顧問である。

この時期の横浜生糸入荷は、輸出生糸の約一割五分

を神戸市場に分与しても、空前的な大入荷を記録する<sup>(53)</sup>。昨年に比べて、本年の売込高は非常に優勢であった。しかし多年の懸案である「生糸正量取引」の問題は、生糸検査所の大拡張とともに機はしだいに進む。

その件で四月六日、横浜の売込問屋と直輪商の会合があり、直輪側に「多少の異論」があった。九日、横浜側の三井、原、日本生糸、江商、綿花の直輪代表、問屋からは渡辺（文七）、洪沢（義二）の二氏が上京し、蚕糸中央会で打合せをした。不日、会合をもつ<sup>(54)</sup>。

このようなとき、原富太郎が頭取を務める第二銀行横須賀支店で「取付」騒ぎが報道された。四月一日である。風説は「原輸出店が三井に頼つて生糸を何千俵か売つて貰ふとか、相場が下がつて損をしたとか上つて損をしたとか可なり色々な心配をされて居る様である」と。経営の堅実をもつて聞こえ「横浜財界の重鎮」原富太郎が重きをなす銀行で、その騒ぎは「無用有害の私議」と地元紙は批評した<sup>(55)</sup>。

四月一日（土）、為替相場はこの日もつづいて高い一方、生糸の高値投機をも控えた輸出商は「両難の苦境」にあった<sup>(57)</sup>。四月二四日、問屋側は正量取引について協議し、二五日も役員会を開く予定であった。だ

が、原富太郎が「事故のために」出席しなかったために、二七日に延期することになる<sup>(58)</sup>。この事故がどのような類であったかは不明である。

このように一九二五年（大正一四）四月中の野田太郎、原富太郎両氏の動静をみると、円覚寺震災復興委員会第一回会合は四月二〇日か、二六日におこなわれたと思える。確証ではないものの、保留もひとつの選択としなければならない。

野田は五月二五日（月）、日記に「大病」と書く。八月二日（日）にいたると、商工大臣と立憲政友会副総裁を辞任した。

野田が死去一ヶ月後の一九二七年（昭和）三月二二日、徳富は追悼会演説をおこなった。追悼会発起人のなかに、のちに横浜専門学校奨学会顧問になる人物が含まれる——青木菊雄、鈴木喜三郎、太田正孝<sup>(59)</sup>。

## おわりに

——旧蔵者の鈴木政次について——

横浜市会は一九二三年（大正一二）一月二三日、東京築港計画への対策等の問題を議するために全員協議会を開く。市長は調査委員会設置を提案し、横浜港調

査委員会の設置が決まる。<sup>(60)</sup>

その事務を担ったのは、市当局主事級の専任担当者一名、数名の係員である。給仕として拝命されたのが、本稿の廃棄書翰旧蔵者の鈴木政次〔マサジ〕である。

一九〇九年（明治四一）四月二五日、横浜で生まれ、石川小学校高等科を卒業して入る。一五歳である。

三月二一日、横浜港調査委員会の第一回会議がおこなわれる。数多くの委員、臨時委員、顧問のなかに原富太郎がいた。半年後の九月一日、関東大震災が起きた。政府はただちに帝都復興審議会官制を施行する。

横浜では九月一〇日、生糸貿易復興を期して横浜貿易復興会を組織し、原富太郎を理事長に選出した。横浜市は九月三〇日横浜市復興会を組織する。全会一致で、同復興会長に就任したのが原富太郎であった。

鈴木政次は先の調査委員会が一時的な停会にともない、同会の渡辺政男、宮野専太郎とともに横浜市復興会の役員を拝命する。同会長の原富太郎の側で仕えた廃棄書翰は一九二五年四月、富太郎の側近として仕えていた時代のものである。

翌二六年（大正一五）九月三〇日、復興事業が整い同会は解散するや辞す。<sup>(61)</sup>その際、富太郎に「引立」て

られ、原合名会社に入社する。月給四〇円であった。以来、同社と子会社に勤務した。最後は群馬県藤岡の昭和林業株式会社子会社で退職を迎えた。

本稿の「はじめに」に登場した「娘」は一九三四年（昭和九）五月一七日、横浜中村町で生まれた長女の五百子さんである。石川小学校をへて、大綱小学校で三（五年生を過ごす。原合名会社の社宅が菊名にあった関係で転校し、買物や風呂は白楽で済ました。空襲を避けるために、母の実家（埼玉上尾）に疎開する。一一歳であった。

わたくしが根岸五百子さんにはじめてお会いしたのは二〇一一年八月六日である。群馬県藤岡のご自宅を訪ねた際、名前の「五百子」を説明する。父は原合名会社に勤めていた関係で、生糸相場に関心が高い。生まれた当時の相場が五百円台まで落ち込む。それで、父は五百子〔イオコ〕と名づける。昔は嫌であった。

だが、原富太郎が約三七年間（一九〇二―三九年）、経営した富岡製糸場は世界遺産の候補になって、いまは誇りに思う。事実、富岡製糸場は二〇一四年六月世界遺産に登録された。

縁が縁を結び、本稿を終えたい。



写真7 横浜市復興会（建物の玄関上に右から「横浜市復興会」とあり、玄関に二人がいる。左側が鈴木政次か。徴兵検査で丙種、背が低かった。）



写真8 鈴木政次・おい夫妻（1933年結婚）

註

- (1) 娘が見慣れた「父の文箱」を見つけたのは、一九九四年ごろである（根岸五百子「三溪園と私」、『原三溪市民研究会五周年記念誌2010～2014』一〇一四年、四一ページ）。原稿は字数制限のため圧縮して、翌七日には再提出した（神奈川大学資料編纂室編『神奈川大学人物誌／横浜専門学校編—神奈川大学創立90周年記念—』二〇一八年一〇月）。その後、縮小しない詳細版として拙稿「横浜専門学校校の奨学会と構図」『神奈川大学史紀要』第四号、二〇一九年三月）に結実をみた。
- (2) 封筒のタテが八・八、ヨコが二〇・八センチで、差出人は大日本蚕糸会会頭子爵牧野忠篤、宛先が「横浜市復興会長原富太郎氏」である。側近は当座凌ぎに、書き損じた書翰を傍にあった封筒に入れた可能性が高い。書翰が書かれた時期は、後者の在任期間内であったことをうかがわせる。しかも、側近が封筒の宛先面に新たに書き加えられた「故」文は、三溪の死去後におこなわれたと判断してよい。
- (3) 『横浜貿易新報』一九三九年八月一七日、一面。
- (4) 原富太郎は一九二三年九月三〇日、関東大震災直後の「横浜市復興会」創立総会にあたって、会長として挨拶をおこなった——復興の第一要素は物質的に非ずして市民の精神如何に存すればなりと（『横浜復興誌』第一巻、二一ページ）。すなわち、原は金銭的という意味合で「物質的」という用語を使用している。
- (5) しかも、書翰の後段（F）で、横浜市内の資金的な援助が第一で、市外はそれに継ぐという「自然の順序」を説く。それは、同上の創立総会で述べる——事実問題として急を要する資金にして国家の援助に俟たざるべからざるも、吾々は他の援助を仰ぐに先立ち、先づ自ら背水の陣を張らざるば他の同情も援助も期待すべからざるべし。
- (6) か、れば吾々市民は横浜なる焼残りの孤城に籠城して、事若し成らずんば各枕を駢べて討死せんのみ（同上、一九六ページ、読点引用者）。
- (7) 戸部村の旧祠「太神宮」は、江戸期の新編武蔵風土記稿に記されるほどに（巻之七十七）、在来の「海岸伊勢の森」と称する山頂に鎮座した宮であった（『万朝報横浜支局編』神奈川県神社写真帖）一九三八年、一〇ページ。それが現在地に奉遷したのは一八七〇年、県社に列せられたのは一八七五年であった。
- (8) 善三郎が氏子総代になったのは一八九五年（明治二八年）九月、富太郎が就いたのは大震災前後といわれる（『横浜市史稿』神社編教会編、一九三二年、五四ページ）。
- (9) 『明治五年—大正五年／伊勢山皇大神宮日誌提要（稿本）』伊勢山皇大神宮社務所、二〇二〇年、一〇一ページ。



- (9) 拙稿「原善一郎のニューヨーク」(前掲『原三市民研究会五周年記念誌2010-2014』五ページ)。善一郎の結婚式の媒酌人は原家顧問弁護士の高橋捨六で、その弁護士事務所で書生を務めていたのが横浜専門学校初代校長の若き日の林頼三郎である。その意味で、富太郎と林頼三郎との関係は横浜専門学校設立以前からのものであった。このようなふたりの深く固い信頼関係こそが、富太郎をして横浜専門学校奨学会顧問就任への道筋をたどることに促したといわねばならない。
- (10) 『横浜貿易新報』一九二八年一月一日、一一面。  
藤本實也『原三溪翁伝』思文閣出版、二〇〇九年、四〇八〜四〇九ページ。だが、第二次大戦後の調査研究で、桃山御殿は誤伝であるといわれるにいたった。その詳細については西和夫『三溪園の建築と原三溪』有隣堂、二〇一二年、第五〜六章に詳しい。
- (11) 『蚕糸経済』第三卷第二十六号、三一ページ。  
『横浜貿易新報』一九三九年四月二〇日、二面。この連載は、翌四〇年八月七日の四五一回で終了した(六面)。三溪死去時は一一五回である。口演者によれば、寄席の高座で全篇を連続講演するのは「全く不可能」であるほどの巨篇である。直前の連載口演、小金井蘆洲『桑平内』が二〇六回で完結した。その意味で、横浜貿易新報社にしてみれば、三溪の病魔回復を祈念して連載の変更であったといえようか。
- (12) 『東京日日新聞』一九三九年八月二〇日、夕刊、一面。  
丹羽邦男「明治初期の農村生活と岐阜町」(『岐阜市史だより』四号、一九七七年、一ページ)。この論考で、丹羽は富太郎の誕生日について従来の誤りを父親の久衛日記を援用して正した。つまり、死去報道でさえ八月「二十三日」とするも(『横浜貿易新報』一九三九年八月一七日一面)、父の日記では誕生日は「二十二日」であると訂正した。この点についての詳細は拙稿「藤本實也と原富太郎」(前掲『原三溪翁伝』八〇四〜八〇七ページ)を参照されたい。
- (13) 『蚕糸経済』第一卷第一二〇号、四四〜四五ページ。肩書は掲載のままである。  
齊藤研也「朝比奈宗源」(前掲『神奈川大学人物誌／横浜専門学校編』四〇ページ)。講師は一九四二年三月まで務めた。三五年度の第七限目で受講した藤沢架装利はのちに東京農工大学教授になっても生涯、師事して回想する――先生が最初の授業で教壇の机上に座禅の形をとって、しばらく黙し「茫々宇宙人無数、幾箇男児是丈夫」と一喝されてから講義をはじめたと(『宮陵』第二十九号、一九八〇年、二四ページ)。
- (14) 朝比奈のこの講義を受講した弟子丸泰仙は戦後の一九六七年、フランスに渡った。坐禅を広めるためである。到着した翌晩、請われ講演会に臨む――私は着たきり雀の雲水姿で、演壇に上がり、そのまま一言もしゃべらず

に、いきなり坐禅を組んだ——(弟子丸泰仙『禪僧ひとりヨーロッパを行く』春秋社、一九七一年、八ページ)。この冒頭の型は朝比奈の講義そのままである。

渡仏にあたって原富太郎の次男、原良三郎は資金として二〇万円を提供した。先代の供養に招かれた席である。その話を富太郎と親しかった松永安左エ門にすると、同じぐらいの資金を出してくれた。電力の鬼といわれた松永も、富太郎の人脈網で横浜専門学校奨学会顧問に就いた財界人である。フランス禅を広めた弟子丸泰仙の功績については呉春美「フランスと禅」が詳しい(『神奈川大学史紀要』第四号、二〇一九年)。

(18) 前掲『蚕糸経済』第一一巻第一二〇号、四四ページ。この追悼文の数年後、藤本實也が聞き取りをおこなったと思われる「朝比奈宗源談」が残る。談話の要点は——(1) 野田卯太郎の「首唱」で、(2) 円覚寺関係の「有力な方」を、(3) 青山会館にお集まり願って、(4) その時に原さんも「お出でを頂いた」(前掲『原三溪翁伝』五四五～五四七ページ)。つまり、両者に齟齬はほとんどなく、カッコでくくった箇所はいっそう明確な語彙で位置づけている。尊重してよい。

(19) 玉村竹二・井上禪定『圓覺寺史』春秋社、一九六四年、七三五ページ。

(20) 朝比奈宗源〔無題跋〕(西郷健雄編『三溪集』一九五一年、私家版、一九丁)。

(21) 浄智寺の住職になった日時は前掲『圓覺寺史』による(七三五ページ)。翌二三年一月、朝比奈は健という男の子を持つ。浅草の寺で修行したとき、隣の寺の娘さんと「いつの間にか仲よく」なった結果である。浄智寺の住職になると、円覚寺の管長に推挙される寺格で、ましてや妻や子があるのは「もつてのほか」とされていたころである(朝比奈宗泉『今日、一途に』二〇〇三年、二〇～二二ページ)。健は後年、父の円覚寺管長時代に得度し「宗泉」となる。わたくしは二〇〇三年七月二三日、学生を連れ浄智寺を訪れた。宗泉師に法話をお願いし、著書までいただいた。宗泉の跡を継いでいるのは子息の恵温師で、宗源の孫に当たる。

(22) 猪野三郎編『大衆人事録』一九二八年版、二の二ページ。二條家は一九一二年七月段階で、鎌倉の長谷二五九番地に「基弘夫人 二條怜(洽)子」名義の別荘を所有する(大橋良平『現在之鎌倉』一九一二年、別荘一覽一ページ)。それは甘縄神明宮前で、前田家別邸に近接する。洽子夫人が前田家の出であったことによるであろうか。現在は鎌倉文学館になっている前田家別邸地は一九九〇年(明治三三)一〇月二三日、原善三郎と翌九一年二四年六月二四日左右田金作の所有地を「買得」したものである(法務局旧土地台帳)。

ところで、二條基弘は一八七八年生まれ、古社寺保存会委員を歴任した。一九〇二年牛込区邸内に人類学上の

標本収集のため「銅駄人類学室」を開設した、いわば華族人類学者であった(平田健「明治期の華族による考古学研究」『史林』第一〇一卷第一号、二〇一八年、二〇四～二〇五ページ、『人事興信録』一九〇三年版、に之部一五四ページ)。

(23) 前掲『原三溪翁伝』、四一二ページ。

(24) 大磯の大雲寺本堂左に「長城中島君墓」と並んで「中嶋湘烟之墓」が立つ。裏面の碑文「湘烟女史名俊子大機院殿長城大居士室也、明治三十四年五月念五日逝矣、諡葆光院殿月洲湘烟大姉」は釈宗演である(読点引用者)。危篤の報が宗演の許に達するや、夫妻との「法縁浅からぬこととて直ちに馳せて来りしも、早や絆切れし」も、即座に偈を賦し、この法号を贈った(石川英司・藤生貞子編『湘烟日記』育成社、一九〇三年、三二二ページ)。

(25) 中嶋久萬吉『政界財界五十年』大日本雄弁会講談社、一九五一年、一二五ページ。

(26) 前掲『原三溪翁伝』、四七～四八ページ。だが、一八九一年(明治二四)の花隠日記は存在せず、結婚時の様子は富太郎からの手紙による報告が父の日記にある。詳細は拙稿「藤本實也と青木富太郎」を参照されたい(同上、八〇九～八一〇ページ)。

屋寿の跡見女学校入学は一八八五年(明治一八)九月二二日「原安入塾」とある(『跡見花隠日記』別巻、跡見学園、二〇〇七年、三一六ページ)。他の箇所は「安子」

である。ふたりの結婚半年後の翌九二年(明治二五)一月一日、花隠は「原富太郎」が来たと日記に記す(同上、第二巻、二〇〇五年、六一ページ)。直後の一九日、富太郎の「養子入籍」が成立するので、新年の挨拶ながら報告に来たのであろうか。

一九二五年一月一日花隠が没した四日後の葬儀に富太郎は四名連名で三〇〇円、渡辺福三郎が二名連名で一〇〇円の香典を差しだした(前掲書、五二五、五八五ページ)。前者の原家は香典中、渋沢栄一でさえ三〇〇円のところ、突出して最大で、いかに花隠に恩義を感じていたかがわかる。

一方、後者の渡辺福三郎妻、玉子は「原安」入塾四年後の一八八九年(明治二二)十一月二四日、入門した(前掲書、第二巻、三四ページ)。一八五八年生まれ、子女をかかえての入学である。そのとき、二歳五か月であった次男は、横浜専門学校教授兼奨学会顧問の渡辺利二郎である。法学士の利二郎は一九三〇年の横浜専門学校一覧によると、経済史、海外貿易事情を担当した(『神奈川大学百年史』資料編I、二〇二四年、六七ページ)。

(27) 「阿部充家関係文書」書簡18(国立国会図書館憲政資料室所蔵)。末尾の無佛の号にたいして、富太郎も封筒の署名とちがつて号「三溪」を使う。

(28) 前掲『三溪集』、一九二〇丁。賦した詩は以下である——有妙好人獻好華。紅葩翠葉映袈裟。金剛般若課持了。

- 願那一人色力加。つまり、優れたひとが美しい花を献じてくれた。そのいただいた蓮華を仏壇の釈迦、弥陀、弥勒の三尊の前に供え、金剛般若経を誦えて、三溪の平癒を念じた漢詩である。妙好人とは三溪を指す。
- (29) 石田秀人『野田大塊翁逸伝』隆文館、一九二七年、二四ページ。
- (30) 拙稿仮題「原富太郎と円覚寺釈宗演」(『神奈川大学史紀要』第一号、二〇二六年)。
- (31) 坂口二郎『野田大塊伝』同刊行会、一九二九年、八三五ページ。
- (32) 「野田卯太郎日記」(国立国会図書館憲政資料室マイクロフィルム版)。
- (33) 前掲『圓覺寺史』、七一五ページ。
- (34) 前掲『野田大塊翁逸伝』、五二―五三ページ。
- (35) 『東京朝日新聞』一九〇五年九月四日、三面。
- (36) 前掲『野田大塊伝』、五七八ページ。
- (37) 『国民新聞』一九〇六年一月一九日、二面。
- (38) 釈宗演「序説」、『碧巖録講話』上巻、碧巖会(光融館)、一九一六年、一ページ)。
- (39) 前掲『釋宗演伝』、二三五ページ。
- (40) 同上、二五八ページ。
- (41) 『鎌倉市史』近代史料編第二、吉川弘文館、一九九〇年、二四八ページ。
- (42) 前掲『圓覺寺史』、七〇五ページ。
- (43) 釈宗演『米欧巡錫』金港堂書籍、一九〇七年、凡例一ページ。
- (44) ラッセル夫妻の夫名は、以下による(The Japan Weekly Mail, May 11, 1903, p. 406.)。
- (45) 前掲『釋宗演伝』、一五九ページ。
- (46) 『福岡日日新聞』一九二四年五月二日七面、一〇日七面。
- (47) 前掲『野田大塊翁逸伝』、五四ページ。
- (48) 徳富猪一郎「青山会館の建設に就て」(『人道』第一九七号、一九二二年一月、三―四ページ)。
- (49) 徳富猪一郎『言志小録』民友社、一九二八年、一八三ページ。正確にいえば、全国から「約二万人六十二万五千余円の寄付」があった(『東京朝日新聞』一九二五年二月二六日、一面)。この数値は表2、二五年二月二五日の条、野田館長の記者発表に基づく。
- (50) 前掲『圓覺寺史』、七五一―七五二ページ。
- (51) 寺寄弘康「関東大震災と「社寺文化財」の復旧」(『神奈川県立博物館研究報告』人文科学、第二八号、二〇〇二年、六〇―六一、六六―六七ページ)。
- (52) 前掲『野田大塊伝』、八〇四ページ。野田はみずから、原を訪ねて「復興の相談」をしたと、同書にある。
- (53) 『横浜貿易新報』一九二五年四月九日、四面。
- (54) 同上、一九二五年四月一〇日、二面。
- (55) 同上、一九二五年四月一三日、二面。
- (56) 同上、一九二五年四月一五日、五面。

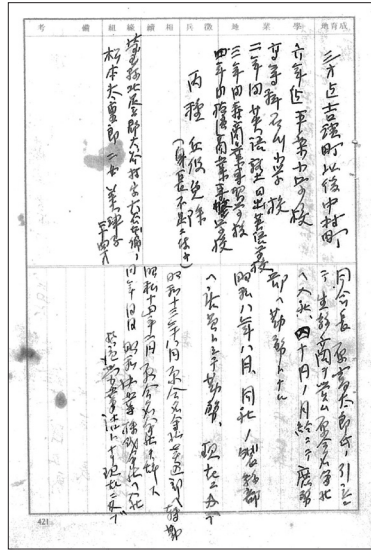


写真9 本稿註61の鈴木政次自筆書類  
の一部分

- (57) 同上、一九二五年四月一八日、四面。
- (58) 同上、一九二五年四月二六日、四面。
- (59) 前掲『野田大塊伝』、八六〇～八六一ページ。
- (60) 『横浜市史』第五卷下、横浜市、一九七六年、二九九ページ。
- (61) 鈴木政次自筆書類（根岸五百子氏所蔵文書）。

〔付記〕 本稿を鈴木政次氏の霊に捧げる。旧蔵資料を提供された長女の根岸五百子、勝美ご夫妻にお世話になった。二〇二四年二月二八日、大学資料編纂室の木内好信室長とともに藤岡のご自宅に伺って、神奈川大学はそれらの資料の寄贈を受けた。神奈川大学の前身、横浜専門学校奨学会顧問に原富太郎が関係することは従来、知られていなかった。その意味でも、本稿の書翰は貴重である。

丹羽邦男、原家の原範行、廣島亨、速水美智子、各位の霊に捧げたい。原富太郎論を書くように、隠に陽に、わたくしを誘引してくれた。国立国会図書館憲政資料室、松岡俊氏、大学資料編纂室では吉原勇樹室長、齊藤研也、田中智子の両氏、精興社にお世話になった。お礼を申し上げる。

引用文に不適切な用語がある。だが、原文を尊重した。ご理解を得たい。